

## 保育士養成課程におけるコロナ禍の施設実習の取り組み

### Practice of Childcare Worker Training Curriculum at Welfare Facilities During the COVID-19 pandemic

石田 慎二<sup>1</sup>

ISHIDA Shinji

帝塚山大学では、新型コロナウイルス感染症の影響で2020年度に予定していた保育実習Ⅰの施設実習は、学外でのすべての実習を中止として学内での演習を実施することになった。本稿では、保育士養成課程におけるコロナ禍の施設実習の取り組みとして、学内演習の内容を報告するとともに、受講生へのアンケート調査から学内演習による学生の学びについてまとめた。その結果、学内演習の充実度は非常に高く、学内演習の学びの自己評価が高いことが明らかになった。

#### 1. はじめに

新型コロナウイルス感染症は保育士養成課程にも大きな影響を与えた。とりわけ、保育実習に関して実習施設からの受け入れの中止により、指定保育士養成施設（以下、「養成校」とする。）では実習施設を確保できない状況が生じた。

このような状況に対して、厚生労働省子ども家庭局保育課は、2020年3月2日に事務連絡「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」を示した。この中で、保育実習については「養成施設にあっては、新型コロナウイルス感染症の影響により実習施設の受け入れの中止等により、実習施設の確保が困難である場合には、年度をまたいで実習を行って差し支えないこと。なお、これらの方法によってもなお実習施設の代替が困難である場合、実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこと」とされ、各養成校が適宜対応することになった。

帝塚山大学（以下、「本学」とする。）においても、一部の実習施設から実習の受け入れができないとの連絡があったため、厚生労働省子ども家庭局保育課からの2021年6月15日付け事務連絡「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」を踏まえて対応することになった。具体的には、この事務連絡により「実習の受け入れ先の状況によって、一部の学生は実習可能でそれ以外の学生は中止となった場合に、当該実習はすべて中止として、履修する学生全員に同じように授業を提供することは差し支えないか」との問いに対して「差し支えない」との回答が示されたことから、2020年度に予定していた保育実習Ⅰの施設実習<sup>1)</sup>は、学外でのすべての実習を中止として学内での演習（以下、「学内演習」とする。）を実施することになった。

学内演習は、2021年3月1日（月）～3月12日（金）（土日除く）の10日間、毎日9時～18時（1時間休憩）で実施した。本稿では、保育士養成課程におけるコロナ禍の施設実習の取り組みとして、学内演習の内容を報告するとともに、受講生へのアンケート調査から学内演習による学生の学びについてまとめる。

---

1 帝塚山大学 教育学部 教授

## 2. 学内での演習の内容

本学の保育実習Ⅰの施設実習は、例年は障害児入所施設、児童発達支援センター、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所の4つの施設種別で実習を実施しており、乳児院や児童養護施設などのいわゆる社会的養護施設ではなく、障害児者福祉施設<sup>2)</sup>のみで実施しているのが特徴である。したがって、学内演習の内容についても障害児者福祉施設での実習の学びを前提として、表1に示したような内容とした。

講演は、8施設・法人の障害児者施設等の職員に依頼して行った。まず施設職員から実践現場の話聞いたうえで、質疑応答の時間を設けて施設職員が学生からの質問に答えることで内容の理解を深めた。

また、演習では、感染防止対策を徹底したうえで、設定したテーマに関するグループディスカッションを実施した。まず、障害児者施設や障害児者の生活等に関するDVDや講義により設定したテーマについての学習をしたうえで、グループディスカッションを通して学びを深め、さらに全体発表を通して意見の共有を行った。

表1 学内演習の内容

	内容
1日目	オリエンテーション 福祉型障害児入所施設の保育士の役割（演習） 医療型障害児入所施設の保育士の役割（演習）
2日目	障害児者の生活の実態（演習） 障害者支援施設の職員の役割（演習）
3日目	障害児者の生活および施設の実態（演習） 障害者支援施設等の支援の実際（講演）
4日目	障害児者の生活の実態（演習） 児童発達支援等の支援の実際（講演）
5日目	障害児支援施設と学校との連携（演習） 障害者支援施設等の支援の実際（講演）
6日目	障害児への支援において大切なこと（演習） 障害児入所施設等の支援の実際（講演）
7日目	障害児者の権利保障（演習） 家庭支援の事例検討（演習） 障害者支援施設等の支援の実際（講演）
8日目	障害児者の生活の実態（演習） 障害者支援施設等の支援の実際（講演）
9日目	家庭支援の事例検討（演習） 障害児者の家庭支援（演習） 障害者支援施設等の支援の実際（講演）
10日目	障害児者相談支援等の支援の実際（講演） 学内演習の総括

## 3. 学内演習による学び

### 1) アンケート調査の概要

#### ①調査対象

2020年度に学内演習を履修した93名を対象に実施した。

#### ②調査方法

10日間の学内演習の最終日に、学内演習の自分自身の学びを振り返ってアンケートへの回答を求めた。アンケートは、本学のe-LearningシステムであるTALES（Tezukayama Active Learning Education Square）を通してインターネット上で実施し、2020年度に学内演習を履修した93名のうち、すべての学生が回答した。

### ③調査項目の設定

本調査は、石田・西村（2019）に基づき18の質問項目を設定した<sup>3)</sup>。それぞれの質問項目について、実習の自己評価を「全くできなかった」「あまりできなかった」「ややできた」「とてもできた」の4段階で測定した。

また、学内演習の充実度についても「全く充実していなかった」「あまり充実していなかった」「やや充実していた」「とても充実していた」の4段階で測定した。

### ④倫理的配慮

アンケート調査の結果については、施設実習の事前事後指導および実習内容の改善のための調査研究に使用すること、回答内容は施設実習の評価には影響しないこと、回答については統計的に処理・分析するため個々の回答が特定されることはないこと、調査研究へ使用してほしくない場合は申し出ることができることを説明したうえで回答を求めた。

## 2) アンケート調査の結果

### ①学内演習の充実度

学内演習の充実度は、「とても充実していた」が50.5%で最も多く、次いで「やや充実していた」が46.2%、「あまり充実していなかった」が3.2%であった（表2）。「とても充実していた」と「やや充実していた」の回答を合わせると96.7%で、ほとんどの学生にとって学内演習が充実した内容になっていたことが明らかになった。

表2 学内演習の充実度

全く充実していなかった	0 (0.0%)
あまり充実していなかった	3 (3.2%)
やや充実していなかった	43 (46.2%)
とても充実していた	47 (50.5%)

### ②学内演習の学び

学内演習の学びについては、本学の保育実習Ⅰの施設実習の実習のねらいと内容に基づき設定した質問項目に関する受講生の達成度の自己評価として示している。各項目の自己評価の結果をみると、ほぼすべての項目において「ややできた」と「とてもできた」の回答を合わせると90%を超えており、学内演習の学びの自己評価が高いことが明らかになった（表3）。

表3 学内演習の学び

	全くできなかった	あまりできなかった	ややできた	とてもできた
障害児者施設の概要	0 (0.0%)	0 (0.0%)	29 (31.1%)	64 (68.8%)
各施設の設立理念と支援の目標	0 (0.0%)	5 (5.4%)	49 (52.7%)	39 (41.9%)
施設の一日の生活の流れ	0 (0.0%)	2 (2.2%)	21 (22.6%)	70 (75.3%)
利用児者の生活状況、活動状況	0 (0.0%)	0 (0.0%)	28 (30.1%)	65 (69.9%)
施設を利用する利用児者の実態	0 (0.0%)	0 (0.0%)	34 (36.6%)	59 (63.4%)
利用児者のニーズ	0 (0.0%)	4 (4.3%)	36 (38.7%)	53 (57.0%)

支援計画の意味を理解し、施設全体の援助の実態	0 (0.0%)	2 (2.2%)	36 (38.7%)	55 (59.1%)
利用児者の特性に応じた支援計画のあり方	0 (0.0%)	2 (2.2%)	35 (37.6%)	56 (60.2%)
利用児者に対する支援方法	0 (0.0%)	2 (2.2%)	24 (25.8%)	67 (72.0%)
職員間の役割分担とチームワーク	0 (0.0%)	0 (0.0%)	25 (26.9%)	68 (73.1%)
施設と家庭との連携のあり方	0 (0.0%)	1 (1.1%)	25 (26.9%)	67 (72.0%)
施設と地域社会との連携のあり方	0 (0.0%)	2 (2.2%)	34 (36.6%)	57 (61.3%)
利用児者にとってより良い生活や関わりのあり方	0 (0.0%)	0 (0.0%)	30 (32.3%)	63 (67.7%)
利用児者の最善の利益を追求する施設全体の取り組み	0 (0.0%)	4 (4.3%)	37 (39.8%)	52 (55.9%)
施設職員の職務	0 (0.0%)	6 (6.5%)	27 (29.0%)	60 (64.5%)
施設職員の職業倫理	1 (1.1%)	9 (9.7%)	51 (54.8%)	32 (34.4%)
施設全体の安全・衛生に対する仕組みと個々の配慮	0 (0.0%)	5 (5.4%)	30 (32.3%)	58 (62.4%)
一人ひとりの利用児者に対する安全・衛生の配慮	0 (0.0%)	0 (0.0%)	27 (29.0%)	66 (71.0%)

#### 4. 学内演習と実践現場での実習における学びの比較

学内演習の学びについて、「全くできなかった」を1点、「あまりできなかった」を2点、「ややできた」を3点、「とてもできた」を4点として算出した各項目の平均値を表4に示した。また、石田・西村（2019）より、同様に算出した実践現場での実習における学びの自己評価の平均値を併せて表4に示した。

表4 学内演習と実践現場での実習における学びの比較

	学内演習	現場実習
障害児者施設の概要	3.69	3.52
各施設の設立理念と支援の目標	3.37	3.39
施設の一日の生活の流れ	3.73	3.94
利用児者の生活状況、活動状況	3.70	3.67
施設を利用する利用児者の実態	3.63	3.17
利用児者のニーズ	3.53	3.38
支援計画の意味を理解し、施設全体の援助の実態	3.57	3.29
利用児者の特性に応じた支援計画のあり方	3.58	3.36
利用児者に対する支援方法	3.70	3.54
職員間の役割分担とチームワーク	3.73	3.35
施設と家庭との連携のあり方	3.71	3.03
施設と地域社会との連携のあり方	3.59	2.83
利用児者にとってより良い生活や関わりのあり方	3.68	3.43

利用児者に対する支援方法	3.70	3.54
職員間の役割分担とチームワーク	3.73	3.35
施設と家庭との連携のあり方	3.71	3.03
施設と地域社会との連携のあり方	3.59	2.83
利用児者にとってより良い生活や関わりのあるあり方	3.68	3.43
利用児者の最善の利益を追求する施設全体の取り組み	3.52	3.36
施設職員の職務	3.58	3.49
施設職員の職業倫理	3.23	2.91
施設全体の安全・衛生に対する仕組みと個々の配慮	3.57	3.48
一人ひとりの利用児者に対する安全・衛生の配慮	3.71	3.53

注) 現場実習の数値については石田・西村(2019)より作成。

表4から学内演習と実践現場での実習における学びを比較すると大きな差はみられないが、学内演習での学びの特徴は、「施設と家庭との連携のあり方」「施設と地域社会との連携のあり方」の平均点が実践現場での実習と比較して大幅に高いということである。

実践現場での実習では、10日間という短い実習期間において家庭や地域社会との連携にまで意識が向いていないこと、実習において家庭や地域社会との連携の場面を目にする機会がほとんどないということにより、家庭や地域社会との連携のあり方については施設実習において理解を深めることができていることが指摘されている(石田・西村2019)。

このような指摘を踏まえて、学内演習では家庭や地域社会との連携について考える機会を設けることを意識して学内演習の内容を設定した。たとえば、障害児者施設等の職員による講演では、実際の家族とのやりとりや行事等で地域住民とともに取り組んでいる事例を紹介してもらい、それに対して学生が質問することで家庭や地域との連携について考える機会を設けた。また、学内演習の後半では、演習において児童発達支援センターにおける家庭支援の事例について検討を行い、そのうえで利用児者の家庭支援について考える機会を設けた。

このように学内演習において意識的に家庭や地域社会との連携について考える機会を設けたことが「施設と家庭との連携のあり方」「施設と地域社会との連携のあり方」の平均点の高さにつながったと考えられる。

## 5. おわりに

本稿では、保育士養成課程におけるコロナ禍の施設実習の取り組みとして、学内演習の内容を報告するとともに、受講生へのアンケート調査から学内演習による学生の学びについてまとめた。その結果、学内演習の充実度は非常に高く、学内演習の学びの自己評価が高いことが明らかになった。

また、学内演習と実践現場での実習における学びを比較すると大きな差はみられないこともうかがえた。もちろん実際に利用児者と関わり、実体験として学んだか否かは大きな違いであり、単純に同様の学びができたとは言えないが、学内演習においても学生の学びはある程度は保障できたと考えられる。

## 注

- 1) 保育士養成課程の保育実習は、必修科目である「保育実習Ⅰ」(実習・4単位:保育所実習2単位・施設実習2単位)と、必修選択科目としていずれかを選択する「保育実習Ⅱ」(実習・2単位:保育所実習)、「保育実習Ⅲ」(実習・2単位:保育所以外の施設実習)が設定されている。
- 2) 本稿では、障害児入所施設、児童発達支援センター、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所の4つの施設種別をまとめて「障害児者福祉施設」と表記する。
- 3) 石田・西村(2019)では、本学の施設実習Aの実習のねらいと内容に基づき21の質問項目を設定しているが、今回は、実践現場での実習を行っていないことから「利用児者と積極的に関わること」「利用児者とコミュニケーションをとること」「利用児者の個別性に配慮した支援を行うこと」の3項目は調査項目から外して18項目とした。

## 引用文献

石田慎二・西村真実(2019)「保育士養成課程における施設実習の現状と課題」『帝塚山大学現代生活学部紀要』15、71-78。